

平成18年度日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練に参加して
～訓練に参加した看護学科1年生の事後調査結果から～

志賀くに子

**Participation in the 2006 Disaster Relief Drill for Block 1 Branches of the
Japanese Red Cross Society**

- From the results of the post hoc survey of first-year nursing student participants -

Kuniko SHIGA

要旨：

平成18年度の日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練に、本学看護学科1年生が参加したのでその概要を述べる。また学習の結果を事後のアンケート調査にもとづき評価・考察したので報告する。日本赤十字社第一ブロック北海道、東北各支部の10救護班による大規模な救護訓練に際し、学生は模擬被災者や防災ボランティア、また運搬要員として参加し、災害時の被災者の心理、災害時のボランティアとしての運搬要員の困難さ、そして救護員に求められる態度などについて多くの学びを得た。

キーワード：災害救護訓練、模擬被災者、運搬要員

Summary : This paper summarizes “The 2006 Disaster Relief Drill for Block 1 branches of the Japanese Red Cross Society”, to which the first-year students in the Department of Nursing at our college/university participated. Also reported are the evaluation and the discussion of what they learned from this program, based upon a post hoc questionnaire survey. The program was conducted on a large scale, involving ten relief squads from the Hokkaido and Tohoku branches in Block 1. Acting as disaster victims, disaster-relief volunteers, or transporting staff, our students learned various things, including the psychology of victims during a disaster, the difficulty of working as a volunteer transporting staff in a disaster, and the kinds of behavior called for from a rescue worker.

Key words : Disaster Relief Drill, disaster victims, transporting staff

I. はじめに

日本赤十字秋田短期大学の看護学科1年生が、平成18年度日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練（以下、訓練と略）に参加する機会を得た。この訓練は、日本赤十字社第一ブロック支部が合同で災害救護訓練を実施することにより、非常災害発生時において迅速かつ的確な災害救護訓練が遂行できるよう、広域的な応援協力体制の

確立を図るとともに、赤十字防災ボランティア及び赤十字奉仕団が円滑な災害救護活動ができるよう充実と強化を図ることを目的とするものである。本稿では、学生の事前準備としての学習計画・内容と実際の概要を紹介し、学生の訓練参加後の調査にもとづいて、その結果および評価を報告する。

II. 企画・準備

平成17年11月、日本赤十字社秋田県支部（以下、日赤秋田県支部と略）からの要請を受けて、筆者らが学生の学習計画・内容など企画・担当することになった。平成18年度の学年暦が決定した後の要請依頼であったため、平成18年10月11日～13日に参加できる看護学科1年生が参加することになった。学生が参加するのは訓練に模擬被災者として60名程度、運搬要員として20名程度である。筆者らは日赤秋田県支部の訓練企画実行委員会に委員として出席し、訓練全体における学生の役割・行動を確認しながら準備を進めた。準備をする際は、平成11年度の看護学科2年生が参加した訓練概要・内容も参考にした。

平成18年度4月のガイダンスの際に学生には、実施を予告し、夏期休暇後に必要物品などの準備を伝達した。

III. 訓練参加の概要

1. 学習の目的・目標

- 1) 日本赤十字社の災害救護訓練の実際を知り、日本赤十字社の果たす役割機能を理解する。
- 2) 模擬被災者を体験することにより、被災者の傷病種類、心理状況を理解するとともに救護（看護）者としての態度を学ぶ。
- 3) 災害ボランティアの果たす役割を理解する。

2. 参加学生：日本赤十字秋田短期大学看護学科1年生83名

3. 日程：平成18年10月11日（水）～13日（金）

4. 会場：日本赤十字秋田短期大学・秋田県立中央公園

5. 救護訓練日程および当日の行動計画（表1）

6. 学生の役割：模擬被災者・家族役、防災ボランティア・搬送要員、その他

7. 宿泊：県営トレーニングセンター宿泊棟

8. 学生の服装・持参品について

- 1) 模擬被災者用衣服（古着）持参
- 2) 当日の服装：長袖・長ズボンの運動着、運動靴
- 3) 持参品：（1）ナップザック、筆記用具、防寒防水の服、タオル、必要最低限の金銭
（2）宿泊用必要物品：洗面用具、着替え、寝着など

9. 訓練想定

- 1) 平成18年10月11日午前7時00分頃、秋田

市を震源としたマグニチュード7.6と推測される地震が発生し、秋田市では震度6強に達した。この地震による被害は甚大で、電話、ガス、水道等のライフライン施設や道路、橋梁などの一部が損壊、多くの建物が倒壊したほか、随所で火災が発生しており、多数の負傷者がでている模様。

- 2) 「こころのケア」の訓練では、発災後10日経過した避難所（5カ所）に各救護班が巡回診療するという想定。そのときのライフラインの復旧状況：電気と電話は使用可能。水道は一部使用可能。学校はまだ授業が開始されていない。会社等も一部は、業務再開されていない。店の営業もまばら。病院は外来の一部のみ再開。余震はまだ続いている。

IV. 事前学習

訓練に備え事前学習を実施した。

1. 平成18年9月19日（火）9：00～12：10 301講義室

- 1) 9：00～9：15 学科長あいさつ
- 2) 9：15～10：30
オリエンテーション：訓練の日程と役割等
- 3) 10：40～12：10 特別講義
「災害看護の基礎知識」：看護学科教授

2. 平成18年9月20日（水）13：00～16：10 講義室他

- 1) 13：00～13：40
災害救護に関する学習：日赤秋田県支部
- 2) 13：40～14：10
訓練時の模擬被災者・搬送役などについて：日赤秋田県支部
- 3) 14：10～14：50
こころのケア訓練時の模擬被災者役について：秋田赤十字病院心理判定員
- 4) 15：00～16：10
搬送方法の演習：日赤秋田県支部、短大看護教員

V. 事後調査

訓練参加後の参加学生の反応を捉えるために事後調査を行う。

1. 調査内容

- 1) 特別講義の内容
- 2) 訓練参加の成果
- 3) 模擬被災者・運搬要員・防災ボランティア

図1 合訓練日程および学生の行動計画

時 日	10月11日(水)	学 生 の 行 動	10月12日(木)	学 生 の 行 動	10月13日(金)	学 生 の 行 動
7:00	支部災害対策本部設置訓練 非常招集・集結訓練		朝食(自炊)	朝食	朝食	
8:00	情報収集・伝達訓練			仮想患者集合 メイキャップし待機		
9:00						
10:00	救護班集結訓練		救護訓練 II ・現地災害対策本部運用訓練 ・救護所開設 ・搬取訓練 ・医療救護訓練 ・傷病者搬送訓練 ・防災ボラセンター設置	救護訓練 II 開始 60分×2回 ・仮想患者は送り出しの指示に従って出勤 ・搬送要員は防災ボランティア本部で受付を済まし、防災ボランティアリーダーの指示を仰ぎ、患者の搬送などを行う	解散	301講義室集合 振り返り 調査用紙配布
11:00	(※昼食は各自)					調査用紙回収
12:00			昼食(炊出し)	昼食(炊出し) アリーナで待機 救護訓練IIIの演技について説明 ・学生は被災後10日位を想定した被災者役		
13:00		集結訓練見学-自由参加 301講義室集合・点呼 名簿チェック				
14:00	学習訓練 I ・トリアージ ・JPTEC ・こころのケア	学習訓練 I - 聴講	救護訓練 III ・こころのケア活動訓練	救護訓練 III 40分×2回 ・避難所に避難した住民の想定で演技		
15:00		短大出発 バス2台	学習訓練 II ・救護班反省会 ・全体会	役割解除 ・メイキャップを落とす (トレーニングセンター浴室)		
16:00	移動	県立中央公園 トレーニングセンター着 オリエンテーション (日程、場所の確認)	移動 休憩	中央公園出発バス2台 短大着		
17:00				帰宅		
18:00	夕食(自炊) 野営準備	夕食 学生60名 着替え・メイキャップ 所定の場所で待機	夕食			
19:00	救護訓練 I	救護訓練 I ・仮想患者は送り出しの指示に従って出勤 ・搬送要員は患者の搬送などを行う 救護訓練 I 終了				
20:00		トレーニングセンターへ戻る 宿泊				
21:00	野営訓練					

- 体験からの学びと困難
- 4) その他感想、自由記載
2. 調査用紙の配布・回収
- 1) 配布: 10月13日(金) 9:00

- 2) 回収: 10月13日(金) 13:00
3. 倫理的配慮
- 調査にあたり学生に対して、調査目的と方法について口頭で説明し、学生個人名は特定されない

こと、得られた結果は成績に全く影響を与えないこと、この調査以外には使用しないことも説明し同意を得た。なお本論文は、本学研究倫理審査委員会の了承を得ている。

VI. 訓練の実際

訓練は、各支部救護班（北海道・青森・岩手・福島は各1箇班、山形・宮城・秋田各2箇班）約100名、統監部16名、防災ボランティア10名、地域ボランティア（地域・特別奉仕団）約50名、看護学科学学生83名、運営スタッフ約40名が参加した大規模な訓練であった。

本学からは、統監部に学長と事務部長、運営スタッフとして事務部1名、教員3名（こころのケア指導者1名、学生指導2名）が参加した。

救護訓練の主な内容は、緊急通信、救護所設営、被災者の収容・処置・搬送、被災者の空輸、防災ボランティアの受け入れ訓練などで、救護班は自己完結型で野営訓練も行われた。

11日の学習訓練Ⅰは、本学合同講義室で、「トリアージ」「JPTEC：外傷病院前救護ガイドラインの略」「こころのケア」などについて講義形式であった。その後、秋田県立中央公園まで移動し、訓練に必要な模擬被災者の特殊メイキャップの準備をした。同日の救護訓練Ⅰは夜間19時～20時に中央公園スカイドーム前において行われ模擬被災者・家族ならびに運搬要員として、行動した。

12日の訓練Ⅱは、スカイドーム前において、9時から12時まで、2グループに分かれての各救護班の訓練が行われた。学生は前日と同様に模擬被災者・家族役割、運搬要員として行動した。

2日目は訓練統監部（支部事務局長・病院長など）や県消防関係者、地域住民など多くの人々が見学する前で、模擬被災者・家族役割、運搬要員として担架搬送を繰り返した。学生は、日赤秋田県支部および秋田赤十字病院看護スタッフによる特殊メイクを施され、被災者に成りきり行動した。学生の真剣な被災者演技と運搬要員の行動は、訓練を臨場感あふれるものにした。

救護訓練Ⅲは、避難所に避難している被災者のこころのケア活動訓練であった。学生は5カ所ある避難所のいずれかに、被災者の学生役として行動した。

VII. 事後調査結果および評価

参加学生の反応を捉えるために事後調査を行っ

た。その結果に若干の考察を加えて評価する。

調査内容は、学生自身の役割、特別講義の内容、訓練参加の成果、被災者役割・運搬要員・防災ボランティア体験からの学びと困難、感想を自由記述で求めた。事後調査用紙は、訓練終了後配布し、当日中に短大で回収した。調査用紙の配布数は82（配布時1名欠席）で回収数は79（回収率96%）であった。

1. 学生自身の役割について

救護訓練Ⅰ・Ⅱにおける担架搬送経験者は、29名であった。患者及び付き添う家族の経験は、救護訓練Ⅰ：66名、救護訓練Ⅱ：46名であった。こころのケア訓練には、学生全員が参加している。学生の役割は表2に示すとおりである。

表2 学生の役割

程度	救護訓練Ⅰ		救護訓練Ⅱ	
	患者役	付添家族	患者役	付添家族
赤	10	5	6	1
黄	20	1	10	2
緑	30	0	24	0
黒	0	0	0	3
計	60	6	40	6
総計	66		46	

単位：人（複数回答）

表の「赤」「黄」「緑」「黒」は傷病者の程度を示すもので、黒（Black Tag）カテゴリーは死亡、もしくは現状では救命不可能とされるものを意味する。赤（Red Tag）カテゴリーは生命に関わる重篤な状態で、救命の可能性があるもの、黄（Yellow Tag）カテゴリーは生命に関わる重篤な状態ではないが、搬送が必要なもの、緑（Green Tag）カテゴリーは救急での搬送の必要がない軽症なものをそれぞれ意味する。

2. 特別講義の内容について

自由記述していた学生は70名であり、記載なしが9名であった。記述されている内容を意味内容から分類した結果111件あり、学生が興味関心を持った内容は、「トリアージ／トリアージタッグ」「日赤の災害救護活動と国際性」、「救護訓練の内容」「災害看護の目的／看護内容」「こころのケアについて」の順に記載が多かった。7年前の学生参加の救護訓練VTRは訓練内容を具体的にイメ

ーじするのに役立っている（表3）。

表3 興味・関心のある内容

順位	内 容	人数
1	トリアージ／トリアージタグ	27
2	日赤の災害救護活動と国際性	19
3	救護訓練の内容	18
4	災害看護の目的／看護内容	16
5	こころのケアについて	12
6	7年前の学生参加の救護訓練VTR	7
7	災害時特有の傷病と処置ケア	5
8	災害医療のポイント（3Tと3S）	4
9	救護班の編成	3
	計	111

単位：件（複数回答）

参加した1年生は、災害看護や赤十字関連授業を履修していないため、講義は興味・関心が深かったようであり、事前学習目的は達成できていると考える。

具体的な記述内容

【トリアージ／トリアージタグ】

・トリアージを理解でき関心を持った、など

【日赤の災害救護活動と国際性】

・赤十字社が災害時にどのような活動をしているのか理解できた、など

【救護訓練の内容】

・訓練をしっかりと捉えられる機会になった、など

【災害看護の目的／看護】

・被災者が何を求めて何を不自由に思っているのかをいかに見つけていくか興味を持った、など

【こころのケアについて】

・こころのケアについてもっと知りたい、など

【7年前の学生参加の救護訓練VTR】

・本物に近く迫力があつた、など

【災害時特有の傷病と処置ケア】

・災害の恐怖や医療の困難さを理解できた、など

【災害医療のポイント（3Tと3S）】

・3つのT（Triage、Treatment、Transport）と3つのS（Staff、Stock、Space）は記憶に残った、など

【救護班の編成】

・救護班の編成が理解できた、など

3. 訓練に参加しての感想

訓練に参加した学生全員79名が、訓練に参加し

表4 訓練に参加して「よかった」理由

順位	理 由	件数
1	災害とはどのようなものか、被災者の立場の理解	43
2	ボランティアとしての役割の理解	38
3	救護班の活動の実際を知る	26
4	看護の学びにつなげていくもの—知識・技術・態度—	17
5	こころのケアの大切さの理解	4
6	訓練全般・その他	6
	計	134

単位：件（複数回答）

て「よかった」と答えている。理由は表4に示すとおりである。

参加した学生全員が「よかった」と答えており、訓練参加の意義を認めている。学生は役割演技によって傷病者の不安や悲しさ・つらさを体験し、また実際的な疑似体験によって災害時の混乱状況を実感し、救護を学習したといえる。また被災者役を通して、そして救護班の活動を目の当たりにして、看護という視点でも理由を述べる事ができている。

学習の目標に掲げている日本赤十字社の災害救護訓練の実際を知り、日本赤十字社の果たす役割機能を理解する、模擬被災者を体験することにより、被災者の傷病種類、心理状況を理解するとともに救護（看護）者としての態度を学ぶ、災害ボランティアの果たす役割を理解する、は総体的に達成されたと言える。

具体的な記述内容

【災害とはどのようなものか、被災者の立場の理解】

・災害の悲惨さを実感することができた・被災者の立場で被災者の気持ちや何を必要としているか考えることができた、など

【ボランティアとしての役割の理解】

・災害が起こった時、どのようなことが生じるのか、何をしなければならないのか学ぶことができた、など

【救護班の活動の実際を知る】

・救護班の活動を知ることができた、など

【看護の学びにつなげていくもの—知識・技術・態度—】

・素早い判断と適切な処置が多くの命を救うのだということが理解できた・的確な判断、正確な処置を身につけなければならない、など

【こころのケアの大切さの理解】

・身体の処置だけでなくこころのケアの必要性についても考えることができた、など

【訓練全般・その他】

- ・貴重な体験をすることができた・多くの学びがあった、など

4. 模擬被災者・運搬要員・防災ボランティア体験からの学びと困難について

学生の学びとして、模擬被災者として65件、運搬要員として15件、防災ボランティアとして4件の記述があった。また困難だったこととして、模擬被災者として23件、運搬要員として18件、防災ボランティアとして4件の記述があった。

模擬被災者を体験することで、対象の理解ができたことは大きな学びといえ、同時に看護者としての観察力や身につける必要性のある技術についても関心を寄せているといえる。そして斜面のある災害現場から、学生4人で担架を用いた担送と、歩ける傷病者の護送にあたり、救護テントまでの道程を何回も往復して運んだ。それは身体的にも負担のかかる活動であったためにほとんど全員が、その難しさ、大変さを述べている。実感した困難さと努力したことを整理すると、以下のようにまとめられる。

具体的な記述内容

<学び>

模擬被災者

【被災者・家族の気持ち】

- ・普段何気なく生活している中で考えることのない被災者の気持ちを考える機会ができた・どんな気持ちで手当を待っているのかということ、など

【救護(班・員)のあり方、被災者への対応の仕方】

- ・看護師や医師の対応のされ方で、声をすごくかけてくれたことや安心感みたいなものを感じたので患者さんに対する声かけの大切さ、など

【救護訓練から】

- ・トリアージ色—本来は黄であっても患者の苦しみ方や痛み方次第では赤としてみられることもあること・騒然とした空気を味わえた、など

【その他】

- ・事前学習でできていると思っていても、実際はできなかったりしたこと

運搬要員

【運搬方法】

- ・混雑する救護所のなかで少しでもスムーズに患者を担架で運ぶにはどうすればよいか、困って

いる人に何をすべきかということ、など

【運搬要員のあり方】

- ・被災者は様々な体型がいるのでとにかく体力を要する・何度も往復して患者を運ぶため非常に体力を使うんだということ、など

【運搬要員の気持ち】

- ・患者さんが本当に苦しんでいるのを間近でみながらの行動なので医師や看護師が他の患者さんを見ていて遅くなるだけでいらいらした、など

【救護(班・員)のあり方、被災者への対応の仕方】

- ・被災者側の不満を医療スタッフは受容しなければならぬ、など

【その他】

- ・救護隊員と被災者とではその視点に大きな差がある・ボランティアの人々の大切さや気力、など

防災ボランティア

【防災ボランティアの気持ち】

- ・ケガをした人を助けてあげたい、治してあげたいというあせりのなかでボランティアを行っているのだということ、など

【防災ボランティアのあり方】

- ・声をかけることも必要だけど被災者の話を聞いてあげるだけのケアもあること、など

<困難>

模擬被災者

【役割演技】

- ・全体的に呼吸が困難な役だったためずっとゼーハーゼーハーと息を荒くしていなければならなくて過呼吸になるため、一旦演技をやめて下さいと言われた、など

【自分の思いの伝え方】

- ・被災者の思いを伝えること・人に「助けて」と治療を早く促すこと、など

【その他】

- ・あまり待たされ過ぎるのは精神的にも疲れた・救急車がなかなか来なかったこと、など

運搬要員

【運搬】

- ・担架で何度も患者を運ぶうちに手がしびれてきて体力的にきつかった、など

【運搬要員の役割】

- ・負傷者に対して(どのように対処したらよいか)戸惑っているところでは、私たちもどうしていいのかわからなかった、など

防災ボランティア

【役割】

- ・被災者への心のケアが自分なりにやってみても悩んだ、など

5. その他、自由記述から

記述されている内容を意味内容から分類した結果、自由記述は175件あり、なかでも「救護班の対応への疑問、不安、怒り、苛立ち」が最も多く76件であった。そして「体験を通しての学びから看護への学びにつなげること」「被災者の置かれている状況の理解」「こころのケアの必要性」「災害ボランティアの役割と必要性」「訓練全般を通しての感想」の順に記載が多かった（表5）。

表5 感想・意見など

順位	内 容	件数
1	救護班の対応への疑問、不安、怒り、苛立ち	76
2	体験を通しての学びから看護への学びにつなげること	29
3	被災者の置かれている状況の理解	27
4	こころのケアの必要	12
5	災害ボランティアの役割と必要性	4
6	その他、訓練全般を通しての感想	27
	計	175

単位：件（複数回答）

学生らは被災者の役割と運搬要員の両方を体験しているため、救護所における救護班員(医師・看護師など)の対応について、多くの感想を記述している。好ましい対応をした救護班からは直接的な看護モデルを学習しているといえる。そして体験を通しての学びを、看護への学びにつなげようとする姿勢が読みとられ、今後の成長に期待したい。

具体的な記述内容

【救護班の対応への疑問、不安、怒り、苛立ち】

- ・救護の進み具合の遅さに苛立ちを覚えた・素早く適切な対応のできる支部もあれば、そうでない支部もあった・救護所が混乱している状況で対応が遅れ、搬送ボランティアが文句を言うと互いのストレスが増すことがわかった・笑いながら治療にあたる救護班の態度に腹が立った、など

【体験を通しての学びから看護への学びにつなげること】

- ・災害における赤十字の救護班の役割を知ることができた・救護処置の方法について学ぶことができた、など

【被災者の置かれている状況の理解】

- ・被災者の不安、あせり等を感じる事ができた・救護所で放置されることに不安や悲しみを感じた、など

【こころのケアの必要性】

- ・こころのケアでは何回も話を聞いてくれることで不安な気持ちが安心すると感じた、など

【災害ボランティアの役割と必要性】

- ・災害にはボランティアスタッフも必要である・被災者の気持ちを理解し、人との助け合い、支え合いの大切さを学んだ、など

【訓練全般を通しての感想】

- ・災害時の対応は大変であることを実感した・騒然とした場でも人の温かみが必要、など

VIII. おわりに

本学の教育方針である、赤十字の使命を果たす人材を育成するという点からみると、平成18年度の日赤第一ブロック支部合同災害救護訓練に参加の機会を与えられ、大きな学習成果を上げたことは、意義深いことである。

本学の現行カリキュラムには赤十字の特色を教育する科目や教育計画が多いわけではなく、実際の訓練に参加することもほとんどない。長期的展望に立ち、本学の教育目標達成と卒業後発展していく学生を育てるためにも、カリキュラムに赤十字の特色を出す科目を設定し、適切な教育内容と方法を計画的に展開すべきであると考えます。

訓練に参加した学生の事後調査をまとめるにあたり、ご協力をいただきました先生方に感謝いたします。

参考文献

- 山本捷子、奥山朝子：看護学生の災害救護訓練参加による学習計画とその結果～日赤第一ブロック支部合同災害救護訓練参加の実際～，日本赤十字秋田短期大学紀要第4号，p29-35，1999。